

ダニエル書3章「火の試練」

1A 金の像への拝礼 1-7

2A 王の命令に背く友人たち 8-18

1B カルデヤ人の訴え 8-12

2B 神のみに仕える表明 13-18

3A 火の中におられる神 19-30

1B 第四の方 19-27

2B 王の賛美 28-30

本文

ダニエル書 3 章を開いてください。私たちは前回、ダニエルがネブカデネザルの夢を解き明かして、それで彼を、バビロン全州を治める高い位に着かせたところを読みました。それから、ダニエルの三人を、バビロン州の事務をつかさどらせるように王に願い出しました。彼は宮廷に留まりましたが、そのため次の出来事には関わっていないようです。バビロン州の事務を司ったダニエルの三人の友人に身に起こったことが 3 章に書かれています。

1A 金の像への拝礼 1-7

3:1 ネブカデネザル王は金の像を造った。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。彼はこれをバビロン州のドラの平野に立てた。3:2 そして、ネブカデネザル王は人を遣わして、太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官を召集し、ネブカデネザル王が立てた像の奉獻式に出席させることにした。

おそらく時は、ネブカデネザルの治世の半ばであろうと考えられます。バビロンの都の郊外にあるドラの平和に、バビロン全土の諸州にいるこれら高官たちを集めて、ここにある金の像を拝ませています。前回、私たちはネブカデネザルが夢を見たところを読みました。それは彼がこれからどうやって治めればよいのかを思い巡らして、それで主が彼に自分の心にあるものが何であるかを知るためものです。ダニエルが言ったことを思い出してください。そして今、王にとって必要なことをしています。これだけの広大な領域を支配しており、そこにはかつて独立していた国々があり、諸民族がいます。したがって、権力を自分自身に集中させないといけません。自分に対して忠誠心を示すために、このような儀礼を行わせました。ちょうどこれは、日本史でいうなら豊臣秀吉の行なった刀狩、そして徳川幕府が行なった参勤交代のようなものです。

しかし、彼は金の像を造らせたことに注目してください。治世の始めに彼が見た夢には、人の像がありました。確かにバビロンは金でありましたが、その下は銀の胸と両腕であり、バビロンは他

の国に取って代わることが示されていました。また、人手によらず切り出された石こそが、大きな山となり、神の国こそが永遠に立つことを表していました。王が立つのも倒れるのも、主が行なわれることであり、神こそが永遠に支配される王の王であることが示されていました。しかし、彼は意図的なのでしょうか、忘れてしまったのでしょうか、分かりませんが、「バビロンは決して倒れない。その力と栄華は永久に続く。」と考えたのでしょうか。次の章を読みますと、彼の高慢が取り扱われますが、主はこのネブカデネザルに、ダニエルの友人三人を通して、さらにご自身が生きておられることを示されます。三人は、生ける神を証するのに用いられることとなります。

この金の像は、極めて象徴的です。高さが60キュビトとありますが、一キュビトは肘から指先までの長さです。45センチとしますと27メートルです。幅6キュビトは2.7メートルです。この寸法、六十キュビトと六キュビトですが、六は人間を表す数字です。七は完全数で神ご自身を表します。だから七日目の安息、七日間の祭り、七つの教会など「七」が登場します。六はソロモン王の時に出てきます。「一年間にソロモンのところにはいつて来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。(1列王 10:14)」神を表す七には満たない人間の栄光にしか過ぎないということ。「六」です。そして同じ六百六十六が、あの反キリスト、獣を表す数字としても登場します。「その数字は人間をさしているからである。その数字は六百六十六である。(黙示 13:18)」キリストに似せて世界を治めますが、キリストと神を冒瀆し反対する者の数字です。したがってネブカデネザルは、自分自身に栄光を付け、それを人々に強要する目的でこの金の像を造っている人間の国であり、終わりの日の反キリストの国の予め示している姿であります。「黙示 13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。」

3:3 そこで太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官は、ネブカデネザル王が立てた像の奉獻式に集まり、ネブカデネザル王が立てた像の前に立った。3:4 伝令官は大声で叫んだ。「諸民、諸国、諸国語の者たちよ。あなたがたにこう命じられている。3:5 あなたがたが角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くときは、ひれ伏して、ネブカデネザル王が立てた金の像を拝め。3:6 ひれ伏して拝まない者はだれでも、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。」3:7 それで、民がみな、角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、および、もろもろの楽器の音を聞いたとき、

いろいろな楽器によって、さぞかし美しい音楽が奏でられたことでしょう。その時に一斉に像に向かって拝みます。そしてそれをしなければ、「ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。」とのこと。つまり、政治的に忠誠を誓わせています。強制力を働かせています。人々が一斉に同じことをすると、人は何も考えずにそれをするできるようになってしまいますね。一度、社会実験のビデオを見たことがあります。病院の診療所の待合室で、五分毎にブザーが鳴って、待っている人々が起立します。そして診察室に一人一人呼ばれて、その知らされていない一人のみにな

りましたが、彼女はそれでもやり続けました。何の意味があるのか分からないでも、やり続けました。こういった強制力が働きます。

そして、「諸民、諸国、諸国語の者たちは、ひれ伏して、ネブカデネザル王が立てた金の像を拝んだ。」というのがすごいです。私たちキリスト者は、「諸民、諸国、諸国語の者たちは、ひれ伏して」イエスが主であるとほめたたえるというのに慣れていますが、黙示録において、天においてこんな賛美があります。「黙示 7:9-10 その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゆろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた。彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」ここでは金の像の前でそれを行なっています。キリスト礼拝のパロディとなっています。

2A 王の命令に背く友人たち 8-18

1B カルデヤ人の訴え 8-12

3:8 こういうことがあったその時、あるカルデヤ人たちが進み出て、ユダヤ人たちを訴えた。3:9 彼らはネブカデネザル王に告げて言った。「王よ。永遠に生きられますように。3:10 王よ。あなたは、『角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞く者は、すべてひれ伏して金の像を拝め。3:11 ひれ伏して拝まない者はだれでも、火の燃える炉の中へ投げ込め。』と命令されました。3:12 ここに、あなたが任命してバビロン州の事務をつかさどらせたユダヤ人シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴがおります。王よ。この者たちはあなたを無視して、あなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝みもいたしません。」

ここにある「訴える」という言葉は、ここの直訳は、「肉を食いちぎる」であります。何をしなくても、キリスト者は悪者扱いされると、ペテロ第一 2 章に書いてあります。「2:12 異邦人の中であって、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」これを彼らはいま行なっています。「カルデヤ人」は、バビロンの元来の民族です。大和民族のようなものです。それが、ユダヤ人という外国人がと強調しています。バビロン名ではなく、あえて、「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴがおります」と言っています。都のあるバビロン州において高い位について、良い働きをしているので、妬みによって中傷しています。

さらに、ユダヤ人だからという意味合いもあります。選びの民に対する反感、妬みです。キリスト者も、時にその試練を受けます。キリストに仕えているということによって、そのつながりに妬みを持ちます。実は、そういう人たちは、全くキリスト教について知らない人ではなく、むしろ、近い人たちが、つまり教会に触れていたたり、つまずいて教会から離れていたたり、または教会で熱心であっても信仰に妥協があったりする人たちです。イエス様を訴えたのも、同じユダヤ教のラビたちであっ

たことを思い出してください。ネブカデネザルのようにまことの神を知らない人、無関心な人たちは、無知によって、別の動機で私たちを迫害します。けれども、このように意図的に、確信的に反対する人たちもいます。

2B 神のみに仕える表明 13-18

13 そこでネブカデネザルは怒りたけり、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを連れて来いと命じた。それでこの人たちは王の前に連れて来られた。14 ネブカデネザルは彼らに言った。「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ。あなたがたは私の神々に仕えず、また私が立てた金の像を拝みもしないというが、ほんとうか。15 もしあなたがたが、角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハーブ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くときに、ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよし。しかし、もし拝まないなら、あなたがたはただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう。」

ネブカデネザルは怒り長けりました。即座に彼らを処刑してもよかったのですが、これまでのバビロン州における事務の実績があったのでしよう。彼は、最後に機会を与えました。

そして、「ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよし。」と言っています。つまり、「心が伴わなくてよい、形だけでよいのだ。」ということです。これが迫害するとき、妥協を迫る時の常です。このことをキリスト者はしばしば、間違いをしてしまいます。「そうだ、行ないではなくて心が大事。行ないに注目するのは、律法主義。」という理屈で、受け入れてしまうのです。そういう問題ではありません。私たちの信仰はもちろん、心の中のことです。しかし、その信仰は行ないとして現れます。行ないと信仰を切り離してよい、とするところに間違いがあります。ここで大事なものは、次のイエス様の言葉です。「マタイ 10:32-33 ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」

そして、「どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう。」と言っています。かつては、ダニエルが示した夢とその解き明かしにおいて、この神がとてつもない知恵を持っているということをネブカデネザルは認めました。けれども、まさか燃える火の炉から彼らを救い出すことなどできるものなのか？という疑問を投げかけているのです。

3:16 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。3:17 もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。3:18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

是非午前礼拝を聞いていない方は、後で聞いてください。ここではさらなる補足をします。私たちは、主に仕えているからこそ、王にも仕え、従っているダニエルの姿を見てきました。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(ローマ 13:1)」と使徒パウロは言いました。そして、「人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から使わされた総督であっても、そうしなさい。(1ペテロ 2:13-14)」とペテロは言っています。そして、キリスト者は、「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。(エペソ 5:21)」という、従う生活が特徴です。夫婦の関係においても、親子関係、雇用関係においても、主は、「互いに服従しなさい」と命じておられるのです(エペソ 5-6 章参照)。

だからなおさらのこと、権力者の前で、その権力に服するのはなく、神に与えられた良心に服従することは、大きな意味を持ちます。ここにこそ、主に仕えているという証しを立てることになります。上に立つ者が自分を煮ても焼いても、どうすることもできる力を持っていることを知った上で、なおかつ自分の行動に対して責任を取るのです。この場合は、自分がバビロンの神々に仕えない代わりに、燃える火の炉に投げ込まれるという形で自分の行動の責任を負います。例えば夫婦関係であれば、夫が「信仰を捨てなければ離婚をする」と言ってきたら、「はい、分かりました。その命令に逆らう代わりに離婚という結果に服します。」という態度を示すのです。これが真の抵抗であり、「人に従うより、神に従うべきです。(使徒 5:29)」というペテロの言葉の意味であります。反発ではなく、甘んじて結果を受け取る、甘受するのです。

この三人は、「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。」と言いました。2章において、「夢を知らせてください、そうすれば解き明かしてごらんにいれます。」とカルデヤ人の知者が言ったとき、ネブカデネザルは「あなたがたは私の言うことにまちがいはないのを見てとって、時をかせごうとしているのだ。(8 節)」と言いました。三人は、「そんなことは私たちはしません、言い訳がましいことを言ってこの場を逃れるつもりはありません」と言っています。そして、「私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。」と言いました。2章においては、天の神がいかにか知恵と秘密を知らせることにおいて秀でていたかをダニエルが証しました。3章においては、「力」において自分たちの神が秀でていることを証しています。それから、午前にお話したように、主の主権を信じていました。「もしそうでなくても」であります。主にすべてを明け渡します。「ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。(1ペテロ 4:19)」

3A 火の中におられる神 19-30

1B 第四の方 19-27

3:19 すると、ネブカデネザルは怒りに満ち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴに対する顔つきが変わった。彼は炉を普通より七倍熱くせよと命じた。3:20 また彼の軍隊の中の力強い者たちに、

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを縛って、火の燃える炉に投げ込めと命じた。3:21 そこで、この人たちは、上着や下着やかぶり物の衣服を着たまま縛られて、火の燃える炉の中に投げ込まれた。3:22 王の命令がきびしく、炉がはなはだ熱かったので、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴを連れて来た者たちは、その火炎に焼き殺された。3:23 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの三人は、縛られたままで、火の燃える炉の中に落ち込んだ。

燃えさかる火の試練です。ペテロは、「あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく(1ペテロ 4:12)」と言いました。つまり、ダニエルの友人三人が通ったこの試練は世の常のものだ、ということです。心の準備をしていなさい、主にあって覚悟しなさいということです。

そして先ほど三人が、「王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。」と言いましたが、それに王は対応しています。ネブカデネザルが持っている権力のありったけの力を、燃える火の炉に注いでいます。炉の熱を七倍にせよと命じ、軍隊の力強い者たちに彼らを縛らせ、しかも普通囚人は服を、刑を受ける前に剥ぎ取られますが、そんな時間も与えることなく衣服を着たまま縛らせました。そして炉まで連れて来た者たちが火炎で焼き殺されてしまいました。これが権力です。そのことを覚悟の上で、彼らは「神はあなたの手から救い出します。」と言ったのです。

3:24 そのとき、ネブカデネザル王は驚き、急いで立ち上がり、その顧問たちに尋ねて言った。「私たちは三人の者を縛って火の中に投げ込んだのではなかったか。」彼らは王に答えて言った。「王さま。そのとおりでございます。」3:25 すると王は言った。「だが、私には、火の中をなわを解かれて歩いている四人の者が見える。しかも彼らは何の害も受けていない。第四の者の姿は神々の子のようにだ。」

驚くことが起こりました。イザヤは、バビロン捕囚の民のことを考えてこうもって預言していました。「あなたが水の中を通り過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。(43:2)」これが文字通り成就しました。主が共におられました。それで害を受けることはありませんでした。ヘブル書 11 章 34 節には、信仰者が「火の勢いを消し」とあります。ダニエル友人三人のことです。

そして第四の者をネブカデネザルは「神々の子のようにだ」と言い表しています。彼は異教徒ですから、「神」ではなく「神々」と表現したわけですが、まさに「神の子のようにだ」と言ったのです。つまり、私たちの主イエス・キリストご自身です。ベツレヘムでマリヤから、聖霊によってお生まれになる前に、旧約時代にはしばしば「主の使い」としてイエス様は現われてくださいました。このように、どんな試練の中にも、イエス様が共にいてくださいます。嵐の時に主が弟子たちの舟に乗ってくださったように、ここの三人と共にイエス様が歩かれたように、私たちと一緒にいてくださいます。私たち

は、試練から免れることができるという約束は与えられていません。試練は通ることを教えられています。けれども、試練の中にいて主が共におられるという約束を下さっています。

3:26 それから、ネブカデネザルは火の燃える炉の口に近づいて言った。「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ。いと高き神のしもべたち。すぐ出て来なさい。」そこで、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは火の中から出て来た。3:27 太守、長官、総督、王の顧問たちが集まり、この人たちを見たが、火は彼らのからだにはききめがなく、その頭の毛も焦げず、上着も以前と変わらず、火のにおいもなかった。

ネブカデネザルは、彼らの神を「いと高き神」と呼んでいます。ダニエルが呼んでいた「天の神」です。バビロンの神々とは違い、最も高い玉座に着いておられる方です。王だけでなく、数多い臣下たちもこの奇跡の証人となりました。先ほど、上着ごと縛ったその衣服が、主が共におられたことの証しとなっています。全然焦げていませんでした。

2B 王の賛美 28-30

3:28 ネブカデネザルは言った。「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。3:29 それゆえ、私は命令する。諸民、諸国、諸国語の者のうち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神を侮る者はだれでも、その手足は切り離され、その家をごみの山とさせる。このように救い出すことのできる神は、3:30 それから王は、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴをバビロン州で栄えさせた。

ネブカデネザルは、彼らが王である自分の命令に背くまでして、自分の神に信頼したことを称賛しています。自分の神々に仕えなかったことを称賛しています。周りの機嫌を伺って、調節し、妥協する姿は、後に不信者の人たちからも侮られます。一貫性がないからです。たとえ不信者の人たちの気分を害することをして、私たちの行動に一貫性があるならば、それを認めるのです。安易に妥協してはいけません、私たちは地の塩として召されています。「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もうなんの役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。(マタイ 5:13)」

けれども、対応がずいぶん極端です。彼の信じる神々においては、謙遜や柔和という言葉はありません。強制が働いているだけです。ネブカデネザルは、まことの神、主のことを「シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神」と呼んでいることに注目してください。数ある神々の中で彼らの神を認めているにしか過ぎません。まだ、「私の神」にはなっていないのです。自分の主にするには、心が砕かれなければいけません。自分のこれまでのあり方、生き方に「否」と言わなければ、イエスを「私の主」とであると告白することができないからです。

三人のすばらしい証しを読むことができましたが、この3章でダニエルが全然出てこなかったことに気づいてください。もちろん、彼が他の人々と共に金の像の前でひれ伏したとは到底考えられません。答えとなるヒントは、2章の最後の節にあります。「しかしダニエルは王の宮廷にとどまった。」王の宮廷にいたということ自体が、奉獻式に参席しなくてもよい理由だったのではないかと思われまます。バビロン全州の役人たちを、奉獻式に召集をかけたのは、自分の権力に服従されるという王の意図があったと思われまます。けれどもダニエルは、その必要もありませんでした。王にあまりにも近い所にいました。権力への服従を試す必要もなかった、と考えられまます。

初めに、3章は預言的な意味も含むことをお話しました。反キリストが自分の像を造り、それを拝むように強要する姿を表していることをお話しました。それを拝まないけれども、生き残って神の国にまで入ることのできる人々を、黙示録7章と14章が描いています。自分たちの額に神の印を押された14万4千人のイスラエル人たちです。獣の国の中で、像を拝まない者たちが殺されていくのに、彼らは子羊がシオンの山に立っているところで賛美を捧げています。主イエス・キリストが地上に再臨されたところに彼らがいるのです。大患難の中を、害を受けずに生き残ったのです。

けれども、獣の国の中で、獣が「神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。(黙示 13:6)」とあります。この天に住む者たちとは誰なのか？黙示録5章と19章に出てくる、教会の姿です。教会はすでに天に引き上げられており、獣の国の中になくてもよいのです。つまり、ダニエルが奉獻式の場になかったことによって像を拝まなかったように、教会も地上にいないことによって獣の像を拝むことがないと言えます。ダニエルは教会の型であり、友人三人は、神に忠実なイスラエル人たちの型です。